

わるいこと
ほけんしつ



R-18

もくじ

- 『不良のひみつ』
作: 橙乃ヨウタ



- 『不良くと保健室』
作: たこわさ

- 『放課後スワップ』
作: 雨宮・ラル7(Rai)

-
- 『ゲーム教師と悪ガキ』
作: 片桐みこ



- 『ひとは見かけが9割とは言えねど』
作: リおん(ふぶんのひと)

-
- 『保険医と不良くん』
作: しるいの

- 『好奇心は白くてふわふわ』
作: ハタ。



- 『わるいことほけんしつ』
作: 早月ウサギ

おい何してんだ！

ああ？なんだよ先生かよ
別にタバコぐらいいいだろ

先生もいつも
門の前で吸ってるし

そのタバコは没収だ。
ほら、渡せ

あのなあ、未成年は吸っちゃダメ
って何回も言ってるだろ

へっ、渡さねーよ



はいはい不良のユウトくん
今日はおむつどうかなー？

う、うるせえ…
その言い方やめろって
言っただろ…

あーあー
いっぱいしちやってるねえ

不良のユウトくんが実はおねしょ
治ってなくてサボりにくるたびに
保健室で先生におむつあててもらっ
てるなんてねえ。

こんなのみんな知ったら
どうなるかなあ？

お、おい！
それだけはやめろ！

こんなのバレたら
おれ、おれ…

ふふふ、大丈夫だよ言わないよ
じゃあおむつ替えよっか！

う、うん…

不良くんと保健室

たこねさ。

聞き慣れたチャイムがなる。今は多分4限目が終わった辺り、今から昼休憩だ。生徒は皆これから昼食のために移動し始める頃合い。ここは私立南西高等学校の保健室。一年のマサキショウゴはそのベッド上で目を覚ました。相変わらずの頭痛。悪寒に加えて咳と鼻水。昨晚から不調を感じており、今朝も相当に悪化していた。それでも無理して学校に来たのは家族が煩わしいから。喘鳴荒立てながら登校し、教室に入ることなく保健室までやってきた。自分より背の低い童顔の保健師、ハヅキに抱えられながらベッドへ横になったのだった。

意識朦朧とした中、ハヅキからOS-1を受けとり一気に飲み干したところまでは覚えている。そこからは清潔な布団カバーの匂いを嗅ぎながら唸っているうちに眠りについてしまった。そして気がついたのが今。

熱がまだあるのはなんとなくわかるが今朝よりは頭痛が落ち着いたように感じられる。そろそろ起きたほうがいいかもしれない。学食のうどんかカレーでも食べたら帰ろう。そう思って足をもたつかせた辺りで寒気が走った。風邪からくるものではない。皮膚に冷たいものが触れたのだ。

直感的に自身の身に何が起きたのかを察した。そういえば最後に催したのもこんな体調不良の時だった。小学5年生になる頃、インフルエンザに罹り何日か寝込んだことがあった。高熱にうなされ、スポーツドリンクを飲み、横になるを繰り返し、ぼんやりした頭で「トイレに行かなくちゃ」と思いながらも体が動かず…。そんな経緯だった。それから5年も時間が経って最悪なタイミングで失敗してしまうなんて…。これまでに何度も体調不良はあったはずなのに。

動かない頭で今の状況を整理する。いやこの後どうするか考えなければ。もうすぐハヅキが声を掛けに来るだろう。その時にバシってしまうのは非常にマズい。高校生になってまでおねしょバシはカッコ悪いの次元が違う。高校生になったから舐められないようにと無理をしてピアスを開けたり髪を染めてみたりして観たのだ。今の姿がとてつもなくみっともなくて情けない。

このまま消えてしまいたい。布団を頭まで被りたくなるが、自分の尿で濡れた布団は重く冷たく、鼻の下まで上げてから手を止めてしまった。もうあまり嗅ぐ機会のなくなったしばらく外気にさらされた尿の生っぽいような甘い臭気。鼻水で詰まった鼻腔にもしっかり伝わってくる。これは現実なのだ。熱でうかされている幻だったらどんなによかっただろうか。

掛け布団を放り投げ自身が濡らしたマットの上に座り込んで安心してしまふ。どうしよう、という言葉だけが頭の中にリフレインして体が上手く動かない。思わず涙が溢れてきてしまふ。こんなところ誰にも見られたくないのに。

「マサキくん、お昼だけど具合どう？」

恐れていた時がやってきた。シャーっという軽快な音と共に容赦なくカーテンが開け放たれる。ものすごく惨めな姿に見えただろう。涙で汚れた顔でショウゴはハヅキを見つめ返してしまう。一瞬固まったハヅキだったがすぐに状況を把握した。このように極度の体調不良や体質などから失敗をしてしまう生徒を見てきている。思春期でデリケートな頃の少年。自分の一挙手で心に傷を与えかねない。ツッパっていてもまだ高校に上がったばかりの子供なのだ。

「具合はどう？汗もかいたと思うから少し着替えない？ジャージの貸し出ししてるからそのまま着て帰ってもいいからさ」

明らかに自分を気遣ってくれる目の前の保健師の優しい言葉に鼻の頭がツンときてしまふ。お願いします。の一言で涙腺が崩壊しそうで視線を逸らし頷くことしかできなかった。ハヅキはショウゴの心情を察すると、少し待ってねと笑顔を見せカーテンを引いた。安堵と共に胸の内に温かいもので満たされるような心地がした。大人からの優しさに触れたのはいつくらいぶりだろう。気の緩みから、まだ膀胱の奥に残っていた物が尿道を伝うとショウゴの大事な所をじんわりと温めていった。











•REC



1:24

「おいお前下手クソ過ぎじゃね？」

「こいつ硬いってえー！」

「お、レアじゃん、うめえ」

ベッドの上にお菓子の袋が広げられて、複数の男子が携帯ゲームに興じている。
それ自体はきっと、どこの家でも日常的にある、別段何ともない光景だろう。

「なあ、ちょっとさ」

普段なら俺も、そこまで細かく言うつもりはない。
静かすぎるよりは多少賑やかな方が好きだし。

「もしもし、聞ってる？」

とは言え。それは場所をわきまえて、度を過ぎてなければの話で。
これが昼間の、授業中ではない、しかも場所がここじゃないなら別にいい。
だけど今、俺の目の前でそれが行われているなら、声をかけるのは当たり前なのだが。

「あの一、」

「うっせえなボケ引っ込んでるカス！！」

声をかけたらかけたで、このように激しい言葉をかけられる。
つまるところ。俺は彼らに嘗められているわけだ。
そうして俺が身を退けば、彼らは何事も無かったかのようにゲームに戻る。
そして放課後まで、時間を潰すようにここで過ごしていく。

この、学校内の保健室で。

~~~~~

縁あって高校の保健室の先生になったのは別に良いけれど。  
一部の不良グループが保健室を占領するようなことがあるとは聞いてない。  
道理で、先代の先生も数か月で異動願いを出しているわけだ。

たった数か月で、大した理由もなく公務員が勤務先を変えるなんて、そうそうある事じゃないのだから。

（困った奴らだ……別に俺もケンカとかしたいわけじゃないんだけど）

この春にこの保健室を任された俺、白猫の長良タクト。

先生として、経験が長いわけじゃない。

それでも、この状況が異常なのはわかる。

校長や教頭に相談をしても、

『いやあ、しかし、下手に事を荒げたらねえ、親御さんとの争いの種にもなりますし？』

とか、

『まあまあ、暴力をしたり犯罪をしているわけではないですから、大目に見てはいかがです』

なんて、嘗められて当然の、ことなかれ主義な返答ばかり。

そりゃ先代も異動したくなるだろうし、俺だってもう既にしたい。

ここに来るまではそれなりに毛並みにも自信があったけど、最近じゃストレスでけばけばしっぱなしだ。

そこで。

これ以上俺にストレスがかかり、十円ハゲが出来てしまう前に対策をするべきだと考えた。

狙うは、グループのリーダー的存在。ハイイロオオカミの、尾月リュウガ。

彼がひとりで保健室に来た時を狙い、仕掛ける。

チャンスは一度きり。

（暴力や権力で訴えられないなら、同じくらいの土俵に降りて、そこで威厳を示してやる！）

甘すぎる上司たちに代わり、懲戒免職になっても良い覚悟で、俺は今日という日を待った。

無論、グループの面々に用事が出来、リュウガが一人になるよう、そうなるように仕組んだのだ。

面談を入れたり、クラスの催しに付き合わせたりして。

グループメンバーが忙しいとなると、帰るということもあるかもしれない。それでも彼は保健室に来る。俺にはその確信があった。

何故なら彼は、とりあえずサボるとなるとここに来るからだ。それも、毎回決まって一番に。

そしてついに。対決の瞬間が訪れようとしていた。

~~~~~

ガラッと保健室の扉が開く。勿論ノックなんてものはない。

見れば、ムスっとした顔のリュウガが一人。他に誰も来ないのがつまらないのだろう。

「よお、おはよう。一人か？」

「うっせ」

声をかけても、おはようすら無く、こっちを見る事も無い。

我が物顔で、備え付けの冷蔵庫から、勝手にしまい込んでいる飲み物を取り出す。

それから一直線にベッドに向かい、鞆を放り投げて靴も脱ぎ捨て寝転がる。

本当に何様なのだろうと思う。が、こんな日常も今日までにしてやる。

「なんだ、今日はマジの一匹オオカミかぁ？」

俺の言葉は無視して、携帯ゲームの電源を入れる。

今日まで散々我慢してきた俺の怒りのスイッチも入る。

「なあ。俺とゲームで勝負しないか？スマッシュスターズで」

俺がゲーム名を口にすると、ぴくっ、とリュウガの耳が動いた。

「実は最近買ったんだけど、結構難しくてさ。練習相手も欲しかったんだ。尾月も持っているんだろ、スマスタ」

今度はちらりと俺の方を見る。
あと一押しで、勝負の土台に立たせられそうだ。

「尾月が勝てば、もう面倒な干渉はしないって約束する。何なら新作ゲームでも買ってやるよ」

「……あんたが勝ったら？」

釣れた。
俺の話に食いつき、条件を確認しに来た。

「あー、そうだな……勝負のリザルトでも撮影させてもらおうかな」
「んだそれ、メリットねえだろ」
「まあまあ、記念撮影ってことさ。尾月と仲良くなれたら良いしな」

それに、メリットがないわけでもないよ。
心の中でそう返答しながら、愛想笑いを浮かべる。

「変な奴……あんた名前なんだっけ」

こいつ。
保健室の先生の名前すら覚えてないのか。
まあ、路傍の石程度に思ってたならそうだろうな。
なら、忘れられないようにしてやるまでだ。

「俺は長良タクト。タクト先生でいいぞ？」
「きも。さっさとやろうぜ。戦場アイテム無しストック3な」

つんとして、すました顔しやがって。
その顔がどんな風に変わるか楽しみだ。

「オッケー。正々堂々よろしくな！」

リュウガは嘗めきった態度を取りながら、自分の飲み物をぐいっと一口飲んだ。
その飲み物すらも俺が細工しているとも知らずに。
この保健室と言う場所が、誰の領域なのか。
俺は今日、それをこの尾月リュウガにわからせてやる。

スマスタは、最大4人のバトルロイヤルゲーム。

様々な戦闘アクションを駆使して相手を吹き飛ばし、倒した回数などを競うシンプルなルールだ。

尾月もそれなりに自信があるのだろうが、俺は自信があるなんてものじゃない。

最近買ったなど嘘もいい所で。過去のシリーズでも、今作でも、何度か大会にも出ていて優勝経験もある。

その事実を知る奴は、この学校にはいない。路傍の石の情報を求めるやつなんているわけがないからだ。

「あ、尾月。同キャラでも良いのか？」

「……あ？別にいいけど」

不意に妙な事を聞かれて、リュウガの眉がつり上がる。

しかし然程気にしなかったのか、すぐに表情が元に戻る。

リュウガの選択キャラは、素早い連続攻撃と軽い取り回しで相手を翻弄するのが得意なフェレット。

俺も同じキャラを選び、笑顔を作る。

「じゃあ、よろしくな。5試合で、3本先取でいこう」

リュウガは何も言わず、ふん、と鼻で笑った。

これがリュウガにとっての地獄の始まりだとは、これっぽっちも想像していないのだろう。

俺は自分のデスクに座ったまま、専用コントローラーを握りしめた。

ゲームが始まってすぐに、俺はリュウガを観察することにした。

と言っても、何もせずにやられたら完全に手抜きだとバレてしまう。

攻撃を空ぶったり、無駄な操作をしたりして、初心者を装う動きを演出していく。

「あっ、あー、ええ、っと」

「ははっ、へたくそ」

「うーん、あれえー?!」

演技をするのは嫌いではない。

わざと負ける流れを作って、そこから下克上を見せるわけだから。

その先にある相手の表情を見たいがために、俺は今本気で手を抜いている。

結果、最初の試合は3－0で負けてみせた。

「あっ、あー……尾月、上手いなあ」

「はっ、買ったばかりの奴が俺に敵うわけないじゃん」

「あれ……もしかして尾月が仲間内で一番上手いのか？」

「そうだよ。ケンカ売の相手間違っただけ」

「あーマジかー……」

まだだ。まだ本気を出すときじゃない。

冷静に、正確に、ミスに見えるプレイをする。

その時が来るまで、尾月には気持ちよくなってもらう必要がある。

これも全て、舞台上の演出に過ぎないのだ。

「んん、負けてばかりいられないな！俺も本気出すぞ」

「ははっ、がんばれ」

白衣を脱いでシャツ姿になり、改めてコントローラーを握り直す。

尾月は相変わらずベッドに寝転び、俺を嘗めきったまま。

いつまでその姿勢でいられるか。見物ではある。

2試合目。

今度は少しでも抵抗を見せ、リュウガを一度は倒す。

が、結局負けてしまうという流れを作った。

これで試合結果はリュウガの2連勝。俺が勝つには、ここから3連勝しなければいけない。

「うっし。最近リリースされたばかりのゲーム買ってもらいな」

「む、まだ試合は終わってないぞ？」

「ははっ、無理だろ？降参したら？」

「いやー、はは、最後までわからないぞ」

初めて俺に向けた笑顔は、実に嘲笑的なもので。
それをきっかけに、俺の堪忍袋の緒が切れた。
教師を、大人を、嘗めたらどうなるか。
最高に大人げない方法で、わからせてやることにした。

「じゃあ、3試合目だね」
「これ勝ったら、マジでゲーム買ってもらうからな？逃げんなよ？」
「はは、いいぞ。尾月も、俺が勝ったら、最後まで逃げるなよー？」
「無理無駄。さっさと終わらせてやるよ」

リュウガの言葉が終わると同時に、3試合目が始まった。
そして俺の顔から、作り笑いを消した。

序盤だけは少しだけリュウガにアドバンテージを取らせてやった。
しかしそれもわずかな時間で。

「……あれ？あ？ん？」

リュウガの口から、焦りから出る独り言が増えてきた。
その混乱が治まらないよう、わざと少し試合を長引かせながら、着実にリュウガのフェレットに攻撃を当てていく。

「は？何だよそれ、当たんね……ああ？」

基礎技術も突き詰めれば、一瞬の攻防に大きな差が出てくる。
リュウガの攻撃は当たらないが、俺の攻撃はリュウガに当たる。
回避も攻撃も、大体読める。念には念を入れて、1試合観察までしたのだから当然だ。

「ちょ、あ、待てこらっ、あっ！」

ドン！という効果と共にリュウガのフェレットが場外に消えて。
結局、1－3で俺が勝った。
下克上の始まりだ。

「ちっ、まぐれかよ……」

「そうだな、儲け儲け」

リュウガはこちらを見ていない。

多分こっちを見てたら、俺が一切笑っていない事にも気づいただろうに。

「じゃあ、ここから勝たせてもらうからなー？」

「……調子こくなよ……」

追い上げられているリュウガに、少しだけ焦りが見える。

そう言う表情は、俺の嗜好に刺さる。

さすがに負けたくないのか、体を起こしてベッドに座った。

そして焦りからか、飲み物を飲む頻度が増えている。

そろそろ、効果も出るだろう。

4試合目が始まって少しした頃。

リュウガが何やら落ち着かない様子になってきた。

足をもじもじさせ、怒ったような表情になっている。

俺にはわかる。尿意を耐えているのだ。

それなりに即効性のある利尿剤。

それを、リュウガがキープしていた飲み物に混ぜた。

保健室の冷蔵庫を私物化した罰でもあるし、この勝負のダメ押しでもある。

「……尾月、動き悪くないか？」

「うっせ、黙れ……！」

焦れば焦る程プレイは乱れる。

そんな小細工無しでも当然、完膚なきまでに叩きのめせるのだが。

二度と俺に齒向かえないくらいにするには、この演出も必要だ。

「……ちなみに、俺の持ちキャラさ」

「……ああ？」

「トータスなんだよね。フェレットはどっちかって言うと苦手だ」
「……は？あ、っ、ちょっ」

トータスは、亀をモチーフにした重量級キャラクター。
突然持ちキャラなどと言われて余計に慌てたのか、リュウガは技を間違えて出して自爆。
4試合目は0-3で俺の勝ち。
後が無いのはお互い様だが、これは完全に、精神的にも、リュウガは勝負の下り坂だ。

「お、ま、まさか、て、手え抜いて……！？」
「5試合目、始めるぞ？まさか、トイレとか言って逃げないよなあ？」

俺がそう言うと、リュウガの顔が一気に切羽詰まったものになる。
リュウガが今、肉体も精神もどういう状態にあるか、俺には手に取るようにわかる。
そして、そんな風に言われてトイレに行くような腰抜けなら、不良グループのリーダーは務まらないだろう。

「に、逃げるわけねえだろ！！さっさとやんぞ！？」
「ふふ、そう来ないとな。あ、俺トータスにしていいいか？」
「か、勝手にしろっ！！」

焦った表情が実に良い。俺の溜飲も下がってくる。

だけど、まだ足りない。最後まで俺は押し切る。

5試合目。最早リュウガに勝ち目はない。
冷や汗をかき、キャラもブレて、動きに精彩が全くない。
そんなフェレットの攻撃が俺のトータスに当たるわけもない。

「はっ、うまっ！？いっ！っは、あ！」

重量級キャラでも、使い方によってはいくらでも攻撃を避けられる。
結果、俺はほぼノーダメージのまま、リュウガのフェレットを完全に打ち負かしていく。

「う、あ、うううっ……！」

いよいよ勝負が決してしまう。

そしてどうやら、もう一つの限界もリュウガに近づいているようで。

最後の攻撃を当てる前に、フェレットの動きが止まった。

「あっ、あっ……！！」

フェレットが場外に吹き飛んだ。

それと同時に、リュウガが小さな悲鳴を上げる。

ゲームのフィニッシュ音が流れ、俺が顔を上げると、リュウガはふるふるとベッドの上で震えていた。

「……ゲームセット。俺の勝ち、だな？」

「う……あ、や、め、こっち来んな……！」

コントローラーを机に置き、デスクを立つ。それからゆっくりとリュウガに近づいていく。

リュウガはこっちに来るなと言えない。

それもそのはず。

何故なら、リュウガの下腹部は今、ぐっしょりと濡れているから。

「……ゲームに熱中して、おもしろいか？ははっ、とんだ高校生もいたもんだな？」

「ち、が……！こ、これは、何かの間違い、でっ」

「まあいいか。ほら、結果を撮影するぞー」

「は、はあっ！！？」

リュウガが隠したりする暇もないうちに、俺はリュウガの現状をスマホで連写した。

ゲーム機のリザルト画面も、濡れたズボンも、ベッドも、恥ずかしそうな顔も何もかもが、俺のスマホに収まっていく。

「や、て、てめっ、どういうつもりでっ」

「口の利き方に気をつけろよ、尾月リュウガ君……？」

「う、っぐっ」

「俺が今、君の秘密を握ってるんだ……わかるよな、おもしろオオカミ君？」

「そ、んな呼び方っ……！！」

まだ抵抗をしようと、口を開こうとするリュウガに、更に迫る。

「事実だろ？トイレも我慢出来ず、俺にもゲームで負けて。それともゲームで負けたショックで漏らしたのか？」

「ち、がっ、」

「真実がどうあれ、俺が証拠の画像を持っているわけだ……もう一度聞くけど、わかるよな……？」

「う、うう、ううううう」

鼻と鼻が触れ合いそうなくらいに顔を近づけ、高圧的に睨みつける。

どちらが強いのか、どちらが上か。それを見せつけられたオオカミの耳と尻尾は、力なく垂れていく。

「これに懲りたら、せめて保健室の中では俺の言うことは聞けよ。来るな、とは言わないからさ。な？」

「う、ぐ、う」

「そう睨むなよ。ちゃんと約束守るなら、俺も口外しない。その後始末もしてやるからさ」

「っ！う、る、せえ……！」

その、と言われ、リュウガは慌てて両手で濡れたズボンを隠した。

しかし当然、濡れ広がっている場所はとても多く、一切隠しきれていない。

「シーツだってどうせ替えるんだ。ジャージくらい持ってるだろ？替えのパンツは貸してやるから。な？一日くらい、洗濯にパンツ出さなくてもばれないだろ？」

「……お前、仕組んでたのかよ……」

さすがに、用意が周到過ぎるとわかったのか。リュウガにある程度追及されかける。しかしここで弱みを見せてはいけない。

「お前……じゃないだろ？ん？」

「うっ……た、タク、ト……」

「んん？」

「……せん、せい……」

「よろしい」

ようやく俺の怒りも治まった。リュウガの頭をよしよしと撫でてやる。

するとリュウガは相当に恥ずかしかったのか、今までの倍くらいに顔を真っ赤にして俺を睨みつけてきた。

「く、そ、このっ……！」

「はいはい、怒るのは良いけど、そのままだと匂いとか残るぞ。さっさと脱いでこれ穿いとけ」

さすがに脱がせて拭いてやる所まで面倒を見るつもりはないので、大きなタオルとパンツをリュウガに投げて渡す。

それを受け取ったリュウガは、怒りと恥ずかしさの混じった顔で部屋の隅っこに逃げて行き、ごそ、ごそ、と着替え始めた。

(……よし。ま、これで少しはマシになるか)

濡れたズボンとパンツを脱いで、情けない後姿を俺に見られる。

これだけ屈辱的な事をされれば、少しはマシな行動をするようになるだろう。

もしかすると、たまり場が保健室じゃなくなるだけかもしれないけど。

一歩進展したのは、きっと間違いは無い。

俺はそう思った。

~~~~~

事実として。

保健室がたまり場に使われることはなくなった。

しかしそれはあくまで、『たまり場』としてであって。

「おいタクト。勝負しろ！」

「こら、先生をつけるよクソガキ」

尾月リュウガは、度々保健室にやってきて、俺にゲームで勝負を挑むようになった。

相変わらず授業をサボって来ている事だけは頂けないが、まあ、最低限登校している事だけは良いかもしれない。

「尾月、今度俺が勝ったらちゃんと授業出るよな」

「はっ、めんどくせ……」

「……そんな口きける立場かよ」

「うっ……る、せーな……不良教師が……」

あの日の勝負は、決して無かったことになっているわけではなく。

リュウガにそれを思い出させるたびに顔を赤くするのは、正直見ていてかわいいものがある。

しかし、そんな苦い思い出のあるはずの俺のところに、どうしてこいつは遊びに来るのか。

それだけは未だに理解が出来ないでいる。

「今日は負けねーからな！トータス対策してきてっから！」

「はいはい乙乙」

「ぶっ倒す！！」

とは言え、年の離れた友達が出来たようなものだと考えれば、割と楽しい日々に、そう悪くはない。

これからもこいつとは長い付き合いになるのかもしれない。

教師と生徒として、一人の人として、ちゃんと向き合っていければ良い。

こうして。

俺とリュウガは仲良くなっていったのだった。

ゲーマー教師と悪ガキ 多分続かない。



ここは、とある伝統ある中高一貫教育の男子校。

進学を目的とした、いわゆる公立校で「普通科」と呼ばれる「進学コース」に加えて、部活動に力を入れた「スポーツコース」もあり、学生寮も完備されている。野球やサッカーといったメジャーなスポーツでは地域代表になることもしばしばあり、割と全国的にも知名度が高い。質実剛健、文武両道を教育方針として掲げる古風な学校、と思いきや、その実は比較的自由的な校風で、決まった制服こそあれど多少の自由は大目に見られている。もっとも、さまざまな種族が入り乱れる世界だから、決まりきった制服というのは無理があるところではあるのだが。それを加味しても、例えばブレザーなしでカーディガンを着ているとかならまだ可愛い方で、パーカーを着ていたり、部活のジャージを着ていたり、と、皆思い思いの服装で過ごしているようだった。

そんな学校では珍しいほどに、しっかりとネクタイを締め、ブレザーを着込んだウサギの少年は、「ポテ、ポテ、」という効果音が聞こえてきそうな足取りで廊下を彼なりに早足で歩いていた。

——急がなくっちゃ……！

垂れ耳を左右に振りながら、俯き加減で教科書を抱えて歩く彼の毛並みは白。この国の固有種族を両親に持っている訳ではなく、生まれつき色素の薄い「アルビノ」で、ウサギ族にしては珍しく短足でぽてっとした身体つき。それでも彼は高等部なのだが、中等部の子と並んでもまだ小さいのではないかというほどだ。その赤い眼はほとんど足元しか映らないのではないかというほど下を向き、大きめのブレザーで手の甲まで隠して教科書を抱える姿は、喩えるならばオバケに怯えてホラーハウスを駆け抜ける子どもだったり、あるいは雷の鳴る空の下を泣きながら帰る子どものそれに近い。もっとも、別段彼の後ろに怯えなければならないようなものは、そうそうなさそうに見えるのだが。

そう、彼の後ろには。

「あだあっ！？」

視野ゼロ距離で早足で歩いていたら、それは前に障害物があれば避けられるというものではないだろう。それが壁やら柱やらといった、普段からあって頭の片隅に認識している障害物でないというのなら尚更だ。

つまるところ、彼がぶつかったのは獣人<sup>ビースト</sup>だ。

ドスッ、と、割と鈍い音がする程度には結構な勢いでぶつかったようだが、相手は全く動じる気配もなく。対して、ぶつかった方の少年はと言えば、バタバタと教科書とノートを廊下に投げ出し、盛大に尻餅をついて涙目になっていた。

「あうっ！？ご、ごめんなさ……」

そう言って、彼が見上げた先にあったのは。

「ひうっ！？」

この学校でも、ひときわ大きな人影だった。

顔や尻尾の特徴的な模様は、彼が虎族であることを示していた。<sup>オトナになる</sup>成獣するとそれなりにしっかりとした身体つきになるのは虎族の男子にとっては皆に当てはまることではあるが、彼はまだ成長過程にありながらそれなりの体格をしていた。身長はクラスで二番か三番か、と、飛び抜けて大きい訳ではないが。しかし、明らかにその纏う雰囲気<sup>オトナになる</sup>が他の子とは一線を画していた。

まず、そもそも。彼は制服を着ていない。

ブレザーを採用しているこの学校において、ボンタンに真っ赤なパーカー、前を全開にした短ランと、いくら緩い校風とはいえ校則違反をぶちぎっているその身なり。今の時代にこんなに絵に描いたような不良姿をした少年がいたものかと、逆に關心してしまうほどだが、そんな事は今のウサギ少年に考える余裕は無さそうだ。

見上げる彼の事を見下ろす、金色の眼。「ギロツ」という効果音がいかにも似合う、そんな眼だ。縦に細長い、ネコ系の種族に特有な瞳孔は、狩人としての祖先を持つが故の獲物を狩るようなそんな気配さえ滲ませる。それが今、草食獣の中でもひときわ無力に近そうな少年の事を見下ろしている。

蛇に睨まれた蛙、とはまさにこの様だろう。

「あ、ああ、ああ……！？」

思わず口を突いて出た謝罪の言葉も、彼の顔を見て二の句が継げないウサギ少年。

しかし、無理はない。何せ、今彼の目の前にいる虎の少年は、学校でも一番の不良少年と噂に名高い人物なのだから。

<sup>こみやまえ</sup>虎宮前 <sup>てっぺい</sup>徹平。

柔道部の先輩を相手に一対多で全員投げ返したとか、ラグビー部のフォワードのタックルを受けてもびくともしなかったどころか、反対に相手が飛ばされたとか、他校の不良に

絡まれた時には舌打ちだけで全員震え上がって踵を返していったとか、どこまでが本当なのかも分からないような逸話が残っている、そんな少年だ。

ウサギ族の少年が膝をガクガクと震わせてしまうのも、頷けるところだろう。

しよわあああああああああ……………っ

そんな彼の尻の下には、盛大に拵えられた水溜りが今も拡大真っ最中。ライトグレーのスラックスは股間を中心に黒っぽく変色して、リノリウムの床に広がる水溜りは蛍光灯の光を反射して黄色く湯気を立てている。移動教室の前にトイレに寄ろうと思っていたところだった彼は、最悪のタイミングで恐怖体験に曝されてしまったらしい。なおも止まらない彼の粗相は、チョロチョロとスラックスから湧水のように溢れてしまっていた。

休み時間もさなかの廊下だ、他の生徒もそこそこ出歩いている、一部始終を見ていた生徒達が声を潜めてその様子を見守っている。騒つく廊下の端で、ポケットに手を突っ込んだテッペイはガリガリと頭を搔くと、他の生徒に聞こえるぐらいに盛大に「チッ！」と舌打ちをして。

「……来い」

「～～っ！？」

グイッ、と、少年の身体が浮き上がるほどの力強さで彼の事を立ち上がらせ、何処かへと彼の事を半ば引き摺るように連れていくのだった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

その行き先とは。

「……んだよ、いねえじゃん」

「……………」

校舎の屋上でもなく、体育館の裏でもなく。

誰もいない、保健室だった。

「ちっ……、くそ……」

ボリボリと頭を搔くと、そう小さく漏らしたテッペイは、保健室の扉の前に掛かった札を「休んでいる人がいます、静かにしてね」と書かれた面に裏返し。ウサギの少年の手を

グイッ、と引いてその中へと連れ込むと。それから、「ビシャンッ！！」、とその扉を雑に閉めて「ハア……」とため息を吐くのだった。

それでやっと少年の手を離れた彼は、腕組みすると明らかに不機嫌そうにブツブツとひとりごとを呟き始める。タンタンタン、と、上履きで床を叩く音に、ウサギの少年はまたビクリとその背中を震わせ、怯えた様子で彼の事を見上げるのだ。目が隠れるほど伸ばした前髪の向こう側から金色の眼がウサギの少年を見下ろして、それから再び「ハア、」とため息をついた。

「……仕方ねえ」

至極面倒くさいというか、あるいは重大な覚悟を決めたかのような、そんな重苦しさのある独り言。それを発した後に、テッペイはウサギの少年を——正確には、その穿いているすっかり色が変わってしまったズボンを指差して言った。

「おい、」

「う、うえっ？！」

「ズボンとパンツ脱げ。」

その一言に、少年は。

「う、うえええっ！？」

思わず仰天して、そんな声を上げたのだ。

そんな彼に構わず、テッペイは保健室の棚を漁るとフェイスタオルとがさがさとしたビニール袋を取り出し、水道でタオルを濡らして袋に突っ込み、電子レンジへ放り込んで「スタート」を押していた。あまりの手際の良さと、噂の彼の姿とギャップのあり過ぎる行動に、ウサギの少年は驚きを隠せずただ呆然とその姿を見ていた。

「まったく、さっさとしろよな？脱げねえなら脱がすぞ」

だが、テッペイはぶっきらぼうにそう言うと、ギロツ、と彼の事を見やった。それで「ヒッ、」と声を上げたウサギの少年は、ガクガクと膝を震わせて縮み上がってしまう。

「チッ」

すっかり怯えきった彼の様子に、不機嫌そうに舌打ちすると。ズカズカと歩み寄ったテッペイは、「ン、」と、ウサギの少年のベルトに手をかけ、シュルリと抜き取ってしまう。だぼっ、としたシルエットのズボンはそのままぺしょん、と音を立てて床の上に落ち、彼は顔を真っ赤にする。ブレザーで隠そうとするその下には、彼のオシッコですっかり黄色くなってしまった、元々は白かったであろうブリーフが。

「あ、ううう……っ」

すっかり泣きそうになっているウサギの少年の足元からズボンを抜き取ると、テッペイはそれを軽く水洗いして洗濯機の中へと放り込んだ。

「パンツ」

「っ！？」

少年の方を見ずに、短くそう言うテッペイ。それで、少年は弾かれたようにサッとブリーフを脱ぎ、わたわたしながら足から抜き去ると。テッペイがしていたのに倣って、水道水で軽くブリーフを洗って絞り、洗濯機の中へと放り込む。

「ほら、拭いとけ」

その間に、「チンッ」と古めかしい機械音を立てた電子レンジから蒸しタオルの入った袋を取り出すと、テッペイは彼に手渡した。「アチチッ」とそれを受け取るウサギの少年に「気を付けろ、ちょっと冷ましてから使え」と言って、保健室の中を横切る。今度はタンスをごそごそと漁りながら、なにやらブツブツと言って何着かズボンを引っ張り出しているようだった。

「あー、これでいいだろ……、おい、裾折って穿いとけ」

「！？」

そう言って、スラックスを一本、ウサギの少年の方へ放って寄越すテッペイ。股間の水滴をあらかじめ拭き取ったタオルを持ってその姿を見ていた彼は、ワンテンポ遅れて取り損なったズボンを頭に引っ掛けてしまった。「わわわっ、」と慌てる彼の様子は気に留める素振りもなく、続けてテッペイは別の引き出しを開けるが。

「ねえな……、っかしいな」

そう呟くと、また別の引き出しを開けて首を傾げる。

「んだよ、何でだよ……」

いくつか引き出しを開けては閉め、開けては閉めしてみるが、探しているモノはどうやら見つからないらしい。

「……ああクソッ、仕方ねえ」

ガシガシガシ、と頭を掻いた彼はそう悪態を吐くと、また別の引き出しを開けた。そして、ガサゴソとその中から何やら取り出すと、ウサギの少年が所在なさに持っているタオルをひったくって、代わりにそれを半ば押し付けるようにして手渡したのだ。

「おい、ぜってえナイショにしてやっから、これ穿いとけ」

「！？」

そう言って、テッペイが彼に手渡したのは。

「お、おむ……！？」

そう、オムツだった。

テレビのCMで見かける、子ども用の可愛らしい柄の入った物ではなく。どちらかと言えば味気ない、柄もない、真っ白なオムツ。どうやら、「S～M」とお尻側のラベルに書かれているあたり、成獣用のオムツの中でも小さめのサイズのものらしい。尻尾穴もちゃんとあり、ある程度サイズが調整出来るようにテープが備わっているようだった。

「あ、あうあ……、で、も、こ、こんなの……！？」

それが何かを、知らない彼ではない。

これを穿くのは、トイレに行くのもままならない、自分でトイレのコントロールができない子だ。まあ、状況的には彼もそうだし、なんなら普段から臆病な性格が災いして、今日ほどではないにしろ「おちびり癖」がある彼も十分これを穿く資格はあると思われるのだが。しかし、これを穿いてしまったら、それはそれで彼のプライドが傷付くというか。兎にも角にも、抵抗感があるのは間違いない事だった。

両手でオムツを握りしめると、わなわなと口元を震わせて涙を浮かべるウサギの少年。

しかし、テッペイはテッペイでこの反応は折り込み済みだったようだ。「だよな、そう  
だと思ったけどさあ……」と小さく漏らすと、モジモジしている彼と、その手に持ったオ  
ムツを見比べる。二人の間に流れる、微妙な沈黙。そして、また不機嫌そうに「チッ、」  
と舌打ちすると、右手で頭をワシワシと掻き回して。

「ああもうっ！！」

意を決したようにそう吼えたと、彼は自分のズボンのベルトを緩めて。  
それから、ずるっ、と。勢いよく彼は、それを膝下まで下げたのだった。

「お、俺も穿いてんだよっ！！だから気にすんなっ！！穿けっ！！」  
「んえっ！！？！？！？！」

あまりに予想外の出来事に、ウサギの少年はぴくんっ、と右耳を立て、目をまん丸にし  
た。

テッペイ少年が、尻尾の付け根まで隠れるパーカーをたくし上げたその下にあったの  
は。

今、彼が手に持っているのと同じ、オムツだった。

彼の大事な部分をふっくらと包んでいる、白い紙製の下着は、何度見たところでやはり  
紛れもなくオムツだった。

思いもよらない突然の出来事に、混乱して顔を真っ赤にして背けながら、それでもチラ  
チラとテッペイの事を見てしまうウサギの少年と。思い切りのよい行動をした割に、後か  
ら襲ってきたとてつもない羞恥心で顔を真っ赤にして、ぷいっ、と顔を背けるテッペイ少  
年と。二人の間に、わずかな沈黙が流れた、その時。

ガラガラガラガラ。

「「～っ！！！！？！？！？」」

保健室の扉が、急に開かれたのだった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「あれえ？これは、どういう状況なのかなあ？」

大きく開かれた扉の向こうにいたのは、薄い黄金色の毛並みをしたゴールデンレトリバー。眼鏡の向こうで柔和な笑みを浮かべた彼は、グレーのハイネックセーターの上から白衣を羽織っていて、いかにも化学の教師か何かを思わせる格好をしていた。

そんな彼の事を見て、カァッ、と顔を真っ赤にしたテッペイは、ボンタンをサッと引き上げると、彼に向かって吼えた。

「ノッ、ノックぐらいしろよなっ！！先生っ！！！」

「ああ、ごめんねえ？中から声が聞こえたもんだから、どうしたのかなって思ってさあ？テッペイクン。」

「……ぜってえワザとだろ」

「とんでもない、廊下の後片付けをして、今戻ってきたところだよぉ？」

ニコニコと笑いながら、彼は手に持ったバケツを流し台の中に置くと、ウサギの少年の傍に落ちていた蒸しタオルだったものを拾い上げて洗濯機の中へと放り込みながら彼に笑いかける。

「ああ、キミはツトムくんだねえ、<sup>うさぎ</sup>宇佐木 <sup>つとむ</sup> 功くん。廊下で騒ぎになってた、って話は聞いてるよぉ。でも、そのあとすぐに行方が分からなくなっちゃったって話だったけど……、ここにいたんだねえ」

「ふえっ！？ご、ごめんなさい……」

「ああ、大丈夫、きっとテッペイクンが連れてきてくれると思ってたしねえ」

「っ！？」

ニコッ、と笑うと、先生はテッペイの方を見た。ばっちり先生と目が合ってしまった彼は、耳まで顔を真っ赤に染めると、プイッ、とそっぽを向いてしまった。そんな彼の事と、先生を見比べるツトム少年。不思議そうな顔をする彼に、先生は人差し指を立てるとニコニコと笑う。

「そうだよぉ、テッペイクンは優しいんだよぉ、ホントはねえ」

洗濯機の中へ液体洗剤を注ぎながら、彼は続ける。

「損してるよねえ、ボクはさあ、普通の格好したらいいんじゃない？っていつも言ってるんだけど」

「だっ！？だって、め……、目立つだろ……！？」

「そっちの格好の方が目立つと思うよお？ははは。」

もちろん、テッペイが言っているのは、奇抜な格好をしていることを指しているのではないと先生は分かっている。それでいて、彼は柔和な笑みを浮かべたまま洗濯機のフタを閉めると、何やら操作してからスタートボタンを押した。

「まあ、キミがいいならいいんだけどねえ、うちの学校はそれとやかく言うことはないからねえ。それに、生徒さんが楽に過ごせるのが一番だからさあ。保健室の先生としては、それが一番大事なんだよねえ。あ、替えの下着なくてごめんね、それで我慢してくれる？」

「あ……、う……、は、はい……」

「大丈夫、意外と薄いしバレないからねえ？テッペイくんが穿いてたのだって知らなかったでしょ？」

「しっ、知ってるわけねえだろ！？く、クラスだって、違うし……」

確かに、今日初めて知った、とツトムは思った。いや、そもそも、テッペイの事をまじまじと見る機会など今までにあっただろうか？学年は一緒のはずだが、体育の授業はだいたいサボっている事が多いし、授業中も途中で廊下を彼が歩いているのを見かけたような気がする。そんな彼に、こんな秘密があったなんて。

「テッペイくんはね、よくここに来てるんだよお。だからいろいろ知ってるの、ズボンの場所とか、洗濯の仕方とか、オムツの場所とかね？」

「おいっ！」

「いつもパーカーを着てるのは、お尻のラインが気になるからだし。プールの授業とかよくサボってるのは、みんなにバレたくないからなんだってさあ。別にここで着替えてから行けばいいと思うんだけどねえ、ボクは構わないよ？テッペイくんのオムツ替えはよく見てるし」

「おいっ！！先生っ！！」

「あはは、いいじゃないかあ。キミだって、自分からツトムくんにおムツ見せたんだし、それぐらい彼に教えてあげてもいいでしょう？今後の参考に、ね？」

「む、むぐぐ……っ」

そう言われると、テッペイは腕組みをして押し黙る。成り行きとは言え、自ら秘密を——それも、学校生活に物凄くダメージを与えそうな特大のやつを、ツトムに見せたぐらいだ。彼の中にも何か思うところがあったに違いない。絶対に知り得る事のなかったそんな彼の一面を垣間見て、ツトムはテッペイの事をまじまじと見てしまう。物言いたげなツ

トムの視線に気付いたテッペイは、顔を真っ赤にするとツトムの事を指差して声を荒げた。

「な、なんだよ……、ったく！お前はいつまでそんな格好してんだよ！さっさと穿くもん穿けっ！」

「うえっ！？ご、ごめんなさい……」

「こおら、テッペイクン、そういう言い方はしないんだよお。それに、そんなこと言って、キミの方が限界じゃないのかい？テッペイクン。」

「うゝ……」

涼やかな顔をしてそう言った先生に、テッペイは再び言葉に詰まる。

そう言えば、と、ツトムは先ほど見た彼のオムツの事を思い出す。自分が手に持っていたオムツと比べると、なんだか股間の周りが膨らんでいて、それにちょっと黄色くなっていたような……。

「ほら、替えてあげるから。ズボン脱ぎなよ。」

「なゝっ！？こ、コイツの前でっ！？」

「もうバレちゃったんだしいいでしょ？それに、放っておいたらあふれちゃうよ？ほらほら」

「う、うう……」

先生はニコニコしながら、さっき彼がしたようにタオルを絞って袋の中に入れると、電子レンジの中に突っ込んで。それから、タンスの引き出しを開けると、ガサゴソとその中から替えのオムツを一枚取り出した。

「って、おいっ！？なんでそっちなんだよっ！！」

先生が手に持ったそれを見て、テッペイは思わずそう叫んだ。

先生が持っていたのは、パンツタイプのオムツではなく、ウエストをテープで留める、いかにもオムツらしいオムツだったからだ。それも、無地のものではなく、なんだか子ども用のオムツのように、可愛らしい模様も入っている。どうやら厚みも、ツトムが手に持っているそれよりかなり分厚いようだ。

顔を真っ赤にして抗議の声を上げるテッペイだったが、そんな彼にメガネの向こうでスッ……、と目を細めると、意地悪な笑みを浮かべて先生は言う。

「そんな限界になるまでオムツをタプタプにしちゃうキミには、はくオムツは穿かせてあげられないなあ？前にも約束したでしょ、汚れちゃったらちゃんと早く替えに来るようにって。忘れちゃったの？」

「で、でもそれは……っ！？」

「ほら、おまた拭いてあげるからね」

「ちょっ？！お、おいっ！？せ、せんせっ！？」

慌てる Teppai に構わず、先生は彼のオムツのサイドステッチをビリビリと破くと、彼の股の間からサッ、とそれを抜き取ってしまった。その下から現れる、ふるっ、とした彼のモノ。

「あっ……！？」

まだ水滴のついたそれは、ツトムが思っていたよりもずっと可愛らしくて、白い毛並みがほんのり薄黄色く色付いているのが見えた。

「み、みんじゃねえよお……っ！？」

「あうっ！？ご、ごめんなさいっ！？」

ずいぶんと弱々しい声に、ツトムは思わず彼からその視線を逸らした。

それから、ずっと手に持っていたオムツに視線を落とすと。彼はひとつ頷いてからそれを広げて、ギャザーの合間へと足を通していく。なんとなく嫌厭したその紙の下着は、思ったよりもずっと肌触りはよく、それに想像以上に伸縮性があって彼の股間を優しく包み込んでくれる。股上も深く、その穿き心地になんとか安心感を覚えるツトムである。

そんな彼の背中では、かさっ、ごそっ、と、紙の擦れる音がして、彼はそっと後ろを振り返った。

「こ、こんなの……、いやだあ……っ！」

「恥ずかしいよねえ？嫌だったら、次から早くオムツ替えに来るんだよ、Teppai くん」

「ちっ、ちくしょおお……」

Teppai の前にしゃがみ込んだ先生は、彼のオムツのテープを留めているところだった。

ところで、顔を真っ赤にした彼はというと。口では悪態を吐きながらも、ちゃんと先生が作業しやすいように少し股を開き、パーカーの裾をたくし上げて持っていて。



「……っ！？」

その姿に、なぜだかドキリとしてしまったツトムは、また顔を赤くして、テッペイが放ってくれたスラックスに足を通していく。やっぱり丈はツトムには長く、かなりダボダボ。ぐるぐると何回か裾を折り曲げて、やっとちょうどいい長さになった。

「よし、出来た。」

「う、うう……」

ツトムがテッペイの方を振り向くと、ちょうどボントンを引き上げるために屈んだところだった。どうやら、股間の事が気になって、中途半端な姿勢になってしまっているらしい。そんな彼の手の間からは、可愛らしい柄のオムツがチラッと見えて、またその姿にツトムは胸がドクン、とひとつ跳ねるのを感じてしまう。涙目になってズボンを引き上げたテッペイは、そんなツトムと視線が合うとみるみる顔を赤くして「ぐるるるる……」と静かに唸るのだった。

「ああ、ツトムくん。ちゃんと尻尾穴は通したかい？」

「へっ！？」

テッペイの事に気を取られていたツトムは、不意に先生からそう声を掛けられて素っ頓狂な声を上げてしまう。そんな彼に構わず、先生は手際よくツトムのズボンのベルトを緩めると、尻の方をくいっ、と引っ張って、彼のオムツを確認するのだった。

「あ、通ってないじゃないか、どれどれ……。よし、いいよ。」

「あ、ありがとうございます……」

素直にペコリと頭を下げるツトムに、ゴールデンレトリバーの先生は、ポンポン、と彼の頭を撫でると「どういたしまして」と微笑んだ。

「困ったらいつでも来て良いからね？それに、悩んでるのはキミだけじゃないって、よく分かったでしょ？」

そうツトムに言うと先生は、ちらっ、とテッペイの方を目配せしてニッコリと笑う。その笑みにつられて、ツトムもコクン、と頷くとニッコリと微笑むのだった。

「は、はい……っ！」

「ち、ちくしょう……っ、さ、さっさと授業戻るぞっ」

恥ずかしさに顔を真っ赤にしたテッペイはというと、照れ隠しにガラッ、と勢いよく扉を開けて。「じゃあな先生っ！！」と捨て台詞のようにそう言うと、ズカズカと大股で廊下に出ていってしまった。

「あっ、待ってよテッペイクンっ！」

ツトムも慌ててそれを追いかけるように保健室を飛び出したが。思い出したようにパタパタ、と足音が聞こえて戻ってきたかと思うと先生に一礼して、またパタパタと軽い足音を立てて、廊下を遠ざかっていったのだった。

「さてさて、どうなることやら……」

可愛い生徒たちの後ろ姿にその目を細めながら、先生は「ふふっ」と小さく笑みをこぼした。

——それから、テッペイはボンタンを穿くのをやめて制服を着るようになったり。廊下を俯きがちに歩いていたツトムが、廊下を談笑しながら歩くようになったり。なんやかんやと、まだまだお話は尽きないようだけど、それはまた別の機会に。



昨日夜  
遊びすぎ  
たかな…



って喜んで  
る場合  
じゃねえ

早く行か  
ねえと漏  
れちまう

それでさー  
ちよっと  
転んじやつて

ぴたっ

もぞぞ…

ふる…





カズ兄い  
!!!?

学校では  
カズ兄じゃ  
無くてカズ  
先生ね?

やあ

所で、そんな  
恰好でどう  
したんだい?

こ、これは  
その…えっと

っていうか  
カズに…  
先生が  
ズボン持って  
行くから…

そうだねえ  
ごめんごめん  
はい返すね

それで、今日は  
どうだい?  
しちやつた?

お、おねしよは  
してねえ…  
しなかったん  
だけど、よ

ここから  
出られなく  
て…

溢れなくて  
よかったねえ

せんせーが  
着替えて  
あげよかレ

うるせえっ!!





しーん

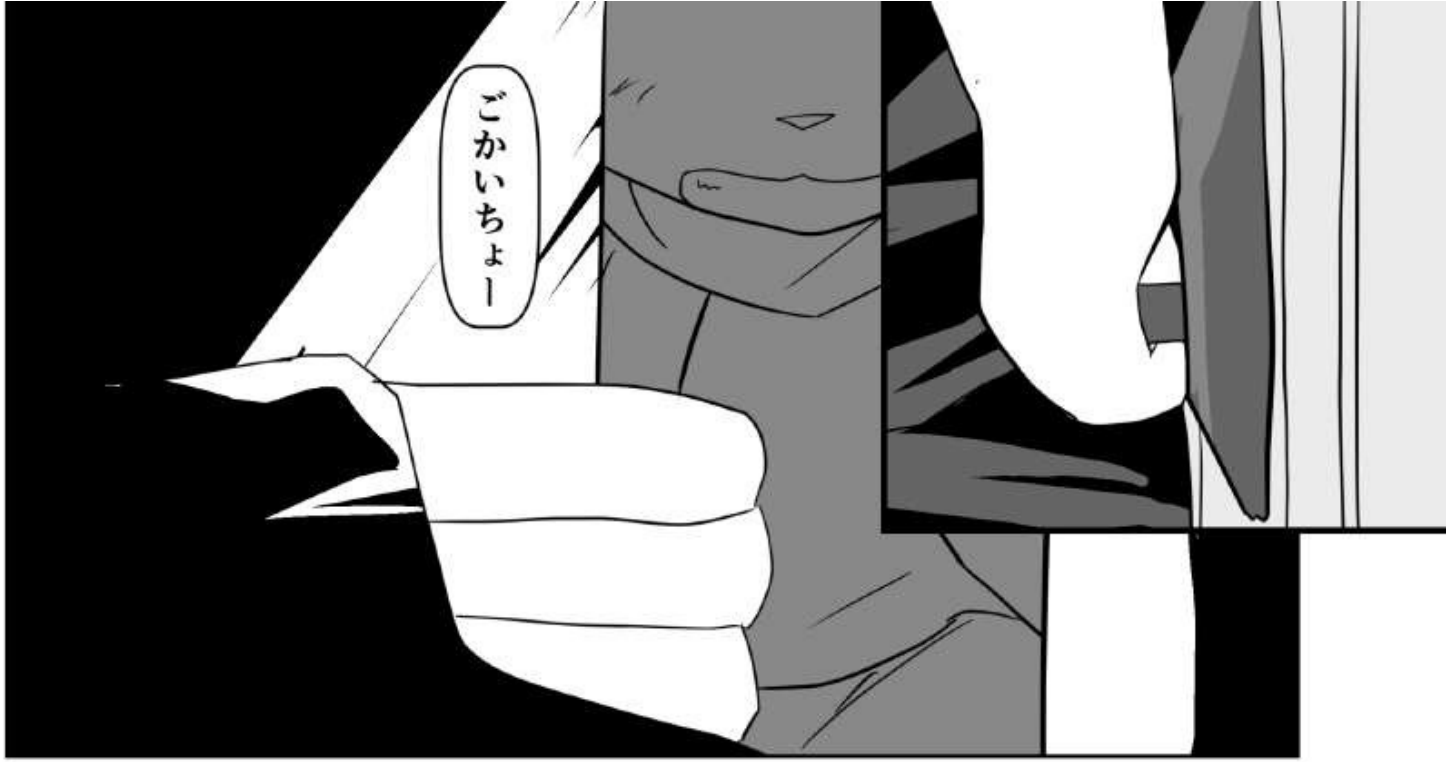


んじゃ、早速……

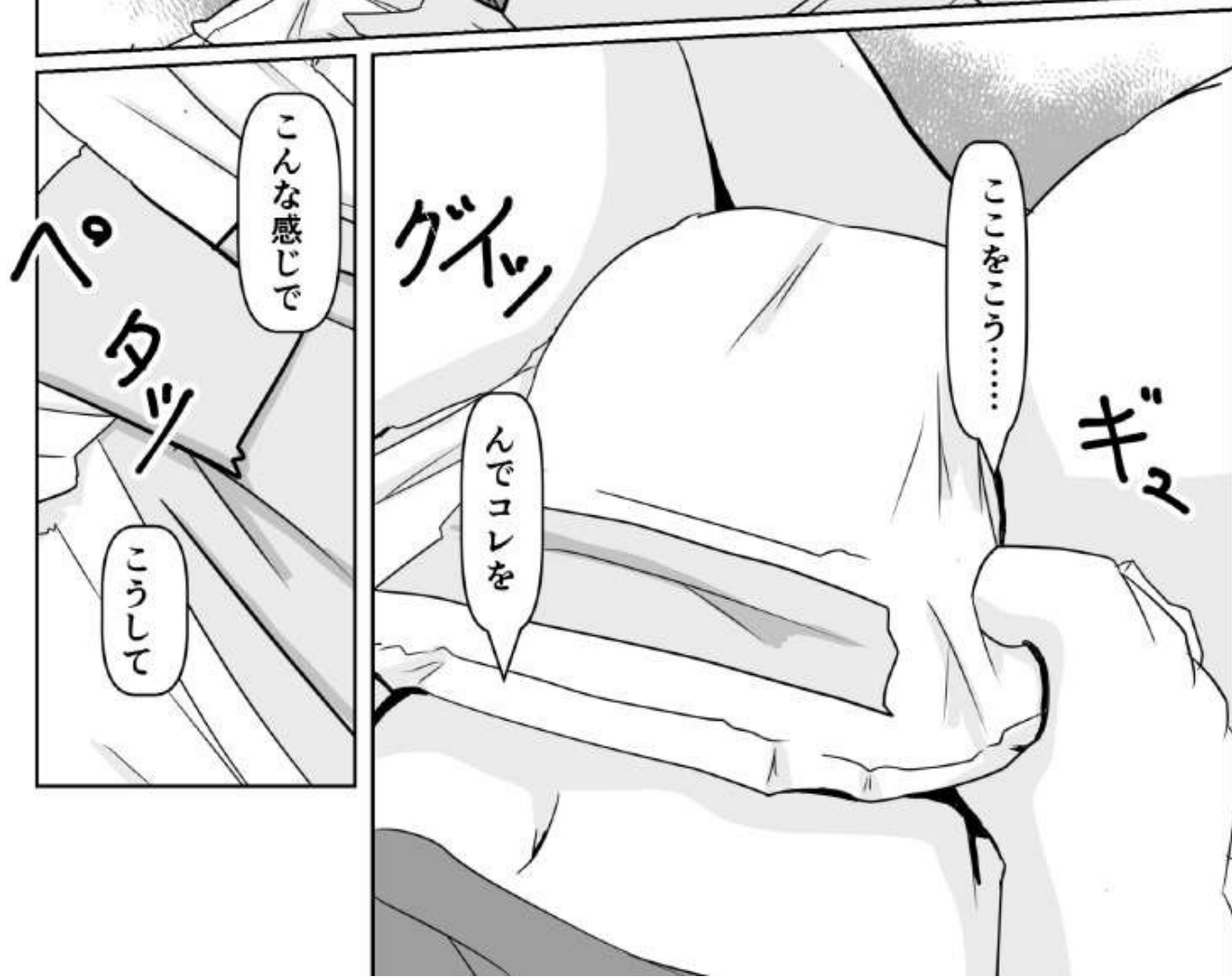


よし……

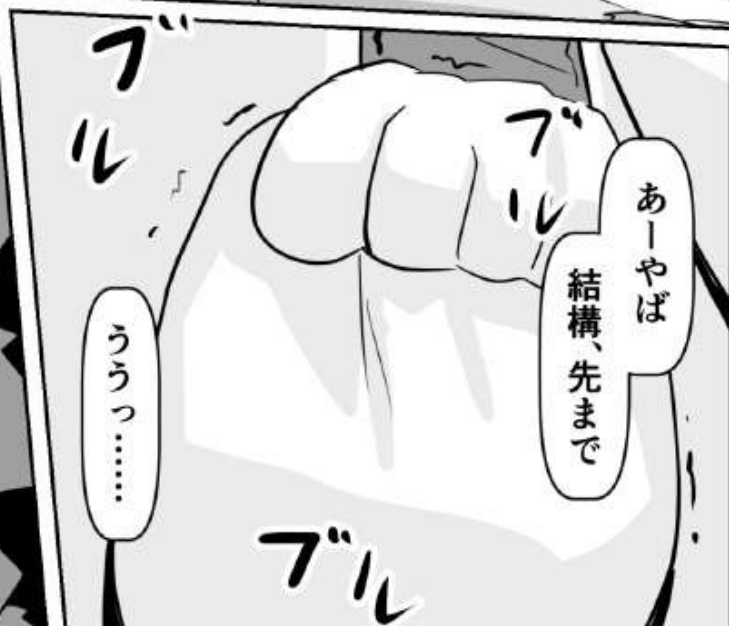
誰もいねえな













わるいこと  
ほけんしつ



ずか

ずか





それじゃあめぎめぎ  
してきれいきれい  
してあげなきゃねー

さっ

もじ

もじ

っっー!!!

えへへ  
偉いよヨウ君

普段は荒れてるけど  
ここではとっても  
いい子だもんねー

ふあ...や、おれ  
じ、じぶんでえ

する

あーあ、おむつ  
こんなにしっ  
ってえ

授業中におしっこ  
でちゃったのかな

おねしょかな  
おもらししっ  
ったのかなあ？

う、うるせえ  
ううう...!!

じょ...

ッ









うんうん  
きれいに  
なったねえ

それじゃあおむつ  
あててあげようね

そしたらおしっこ  
しいいーってし  
ちゃっても

大丈夫  
だからねえ？

ひ

おい



うううう...!!

センセ、はやくう  
しろよあ...!!

ぐい

はい、あんよ  
あけて...

ヨウ君のおしりは  
おしっこ匂いして  
かわいいねえ、うふふ

ぽる

わサ

カサ

テープできっちり  
とめて…っ

ピッ

…はい  
前をあてて

ピッ

できたよ  
ヨウ君っ！

う、う、う

かあ ああ…

新品のおむつは  
きもちいいねえ

そそんな  
ことお…

もーつよがり  
だなあ、ヨウ君は

さっ、ズボンはいて  
授業に戻って…

しゃ…















